

# ユネスコESD世界会合参加報告



主催：立教大学ESD研究センター

持続可能な開発のための教育の10年推進会議（ESD-J）

阿部治、佐藤真久、野口扶弥子

# 会合概要

2009年3月31日～4月2日

於：ドイツ、ボン市国際会議センター

主催：ユネスコ、ドイツ連邦共和国

協力：ドイツユネスコ国内委員会



- ・ ESDの10年のこれを振り返り、これからのあり方について議論をする、中間年レビュー会合の位置づけ
- ・ ユネスコ関係者、各加盟国の大臣、政府関係者、大学、NGOを含む、150カ国、900名が参加

# 会合の目的

1. 「なぜESDが必要なのか？」—あらゆる教育と質ある教育の実現に関連し、あらゆる教育、質ある教育に、ESDの要素が不可欠であるということを明らかにする
2. 「何をお互いに学びあえるのか？」—ESDに関する国際的な交流を促進する
3. 「これまで何を達成し、学ぶべき教訓は何であったのか？」—DESD実施に関するこれまでの“棚卸し”(実績評価)をする
4. 「進むべき方向はどこなのか？」—後半にむけた戦略を練る



# 会合の構成

- ハイレベル会合
- 全体会
- 分科会
- 事例実施地域を見学するプロジェクトベースの分科会
- サイドイベント
- 優良事例および加盟国の取り組みの展示



# 全体会報告



# 全体会の概要

- 3日間で4回の全体会
- 4つの準備会合成果の共有－市民社会を含むパートナーシップ構築や教員教育の重要性
- 最終年会合の日本開催の意向伝達
- 後半に向けたESDにむけた話題提供（女兒・女性への教育・ESDの充実、国際レベルでの対話の場作りの必要性など）
- 世界の各地域でのESDの進捗状況報告
- ボン宣言文のドラフト確認（3回）

# 分科会報告



# 分科会の概要

- 4つのテーマに関連した、22の分科会
    - 主要な持続可能な開発課題の克服に向けたESDの関連性
    - ESD推進のためのパートナーシップの構築
    - ESDのための能力構築
    - ESDと教育と学習のプロセス
- \* ジェンダー、包括性、文化、伝統知、人権、MDGs、技術といったテーマはどの分科会でも共通に扱われる



# 分科会9:地域と地球的な課題を包括する学びの場 としてのユネスコ生物圏保護区

- ・ 南アフリカ、ドイツ、フランス、西アフリカ、カナダ、ベトナム、オーストラリアの事例紹介－環境保全と経済を両立させる活動、パートナーシップの構築といった取組や課題を共有
  - － 地域を「学びのための生きた研究室として捉える「ラーニング・ラボラトリー」という視点や、伝統知を科学知に取り入れ新しい知を構築してきた取組みがハイライトされる。
- ・ MABを活用してESDを推進するための戦略作成
  - － ユネスコチェアやASPネットなど既存のユネスコプログラムとMABを連携させてESDをすすめる
  - － 地域で持続可能な地域づくりにとりくんできたNGOの活用
  - － 地域、リージョナルレベルでの知見の共有の仕組みづくり
  - － 活動の可視化

# 分科会14：市民社会の役割とESD

## 概要

「市民社会が果たしてきた役割」、「特異性」、「高等教育機関に対し市民社会が果たす役割」、「ESDの10年の後半、市民社会が果たすべき役割」の4テーマを、4グループに分かれ、ワールドカフェ方式で話し合う



# 分科会14:市民社会の役割とESD

## 主な意見

### NGOの貢献

- ①地域の文脈に即した形で適切な手法を用いてきた
- ②既存の知を捉えなおし、伝統知やローカル・ナレッジを重要視しながら、近代知・学術的な知と統合して新しい知を作り出す
- ③新しい知の構築が、地域の人びとの力づけと当事者意識の向上へと貢献

### NGOの課題

- ①このような国際会議に参加できるNGOが少ない
- ②参加を可能にする資金的支援がない  
→2014年の会合には、是非とも市民社会からの参加数を増やし、各国の代表団は、加盟国政府からの参加者2人とNGO参加者4名という構成にするべき

# 分科会14:市民社会の役割とESD

## 今後への提案

- NGOの取り組みの優良事例を発掘し、共有する土台を構築(特に、ノンフォーマル、インフォーマル教育の分野で)
- 既存のユネスコのネットワーク(ユネスコスクールやユネスコクラブ)などを活用し、これらのネットワークに適切な支援をする
- 市民社会の活動の促進と支援に関しての、ユネスコ地域オフィスおよびユネスコ国内委員会の役割を強化する

# プロジェクトベースの分科会

- ボン周辺地域における、ESDの実践事例を見学し、活動にかかわる人びとと交流・意見交換
- 14の分科会—幼児教育、国際理解教育、生物多様性、ユネスコスクール、高等教育など多様なテーマ



# 展示ブース

- 25のESDプロジェクトを紹介する展示のほか、ユネスコ加盟国・国連機関の各活動を紹介する展示ブースが設置
- 日本ブースには、文科省、環境省、ESD-J、ユネスコアジア文化センター(ACCU)、国立国会図書館が共同出展



# ボン宣言文



# ボン宣言文 起草のプロセス

- 全体会、各分科会の報告→宣言文起草委員会による議論・起草(公開)→全体会での共有→起草委員会での修正→全体会での共有→最終化
- 起草委員会：各加盟国の代表18名および専門家12名からなる→市民社会から、国連大学の名執氏およびCEEのカルティケヤ氏が参加



# ボン宣言文 ハイライト

- MDGsやEFA、気候変動といった主要国際課題との連動
- 女児／女性への質ある教育・ESD、他の国連機関（UNDP、UNEP、UNFPA）などとの連携
- ラーニングラバトリーとしての地域やバイオリージョン、市民社会の重要な役割、インフォーマル教育の重要性など、新しい視点が盛り込まれた

→実現可能かどうかはわからないが、具体的な行動目標が並び、概念・理論中心と批判をされてきているESDから、小さくとも前進？

# ユネスコESD世界会合 ESDRC・ESD-Jからの貢献

- 国際アドバイザー委員会(阿部)：会合の企画へ提言
- 分科会14:市民社会の役割とESD会合報告者(野口)：会合議論とりまとめと、宣言文へのインプット文章作成
- 加盟国ブースでの市民社会の取り組みや日本のESDの取り組みのアピール

# 最終会合に向けて

- 最終会合のイメージの共有（政府会議＋民間会議）
- 国内の取り組みの更なる実施と評価
- 日本からの海外発信の強化
- 円卓会議の強化
- UNESCOをはじめとする国際機関などとの連携強化
- アジアにおける日本のイニシアティブの発揮
- オールジャパンによる受け入れ体制づくり
- ロードマップの作成